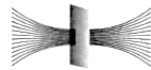


学会30周年を迎えるにあたって

・ ・ 視 点



ご存知のように今年は品質工学会が発足して30年の節目を迎える。各所で、さまざまな機会を通じて、多くの人が祝い、論じ、述べ、記すことで、記念の年にくさびを打ち込もうとしている。

われわれ学会誌編集担当者もこれを機に、このスペースをお借りして、これまでの活動や取組みの検証、反省、今後の展望や進め方に対する期待、危惧等々の、在り来りな奇麗事だけではなく、品質工学に対するひそかな^{きようし}矜持、秘めたる私案、誰にも言えない悩み、やり場のない怒り等まで含めた、品質工学への思いをぶつけてみたい。

テーマは特に定めずにフリーとし、30周年に少しでも関係することなら何でもOK。何なら意見の鎖をつなげていくうちに30周年から少々離れてしまっても問題なし！として、公開する機会を作りづらいような内容まで、さまざまな腹の中の本音を吐露してみた。そんな通常とは違う、表立って伝えづらいことでも、少しでも今後の学会と社会に役立てられれば、進歩の種になればと思う。だが飽くまでもこれらは編集委員各個人の意見であることを理解し、不快ならば読み飛ばしていただきたい。人は皆、自分と違う考えは受け入れ難いものだから、それはそれで仕方ないと思うが、出来れば前向きな議論に発展することを望みたい。

この30年間の日本社会と学会

一この30年は、残念ながら日本の「失われた30年」と合致する。効率化と称して余裕を削減し、無駄なものを製造してきたということはないだろうか。世界標準に合わせると称して株主（金持ち）還元を優先し、効率化の名のもとに労働者への分配（賃金）を削減してきて来たツケが、今、回ってきているように思う。

一品質工学は効率化を求めるが、重要なのは効率化で浮いた労働力、資源、資金をどう活用するか哲学も含むものである。残念ながら、どう活用するかの部分は効率化の部分に比べて難しく、実現に至らないまま空費されたような気がする。

一高度成長期の所得倍増計画は、公害につながるなど悪影響もあったが、物価ではなく所得の増加を図っていた点で、昨今のいわゆるインフレ目標に比べて理にかなっていた。効率化の名のもとに非正規雇用が増え、所得が増えない（下がっていく）状況で物価が上がることは、労働者の疲弊につながる。生活費が不十分な状況では金利が低いことは何の恩恵にもならない。借入金で何かを買うことは、将来返済できるだけの収入が見込める場合にこそ行うことで、その見込みがないのであればさらなる困窮につながるだけである。所得が増えない中で物価が上がっても、購入額が増やせるわけではないのでGDPは上がりようがない。

一余裕を減らして無駄なものを作ってきた30年のように思える。「社会の自由の総和の拡大」のためには生産工程での効率化だけではなく、その生産自体の社会への負荷や影響、持続性への寄与を含めて考慮が必要だった。積極的ではないにしろ、現在の状況をもたらしてしまった年代として^{じくじ}忸怩たる思いがある。

一今回は、いわゆる周年記念行事に関してである。小さな団体や店舗などでは1周年、2周年記念という場合もあるが、気持ち的には「なんとかここまでやってこれた、これからも頑張ります」的な意味合いがあるのだろう。大きな団体や行事になると、5の倍数や10の倍数を記念の年次に使用することが多いようである。単に切りの良い年数を迎えたからと年数が先に立ってしまうこともあるかも知れない